



次の3年は「新機軸」～鈴木厚人KEK機構長第二期就任インタビュー～



インタビューに答えるKEK機構長・鈴木厚人氏 (写真: 右)

4月1日付で次の3年間の任期に就任した鈴木厚人高エネルギー加速器研究機構 (KEK) 機構長に今後の抱負についてインタビューした。

— 第一期の3年間で振り返っての感想は？

素粒子・原子核物理学や物質・生命科学などの基礎科学および加速器科学の国内外の拠点として、関連する研究分野の学会やコミュニティとの議論を進めて、KEKの将来計画、いわゆる「ロードマップ」を策定しました。このロードマップはJ-PARC (大強度陽子加速器施設) の建設から実験開始とアップグレード、KEKBのアップグレード、すなわちスーパーKEKB、フォトンファクトリーの増強、LHC (大型ハドロンコライダー) の建設と実験開始、今後の増強、ILC (国際リニアコライダー) や ERL (エネルギー回収型線形加速器) などを見据えた先端加速器技術の研究開発など、今後5～10年のこの分野での研究の将来計画です。現在、ロードマップの実現に向けて、関連する関係者と調整を進めています。

— 昨年はノーベル賞受賞で日本中が沸きましたね。

小林先生、益川先生、南部先生、それぞれにKEKの研究活動ともつながりが深いですから、ノーベル賞受賞はKEKに大きな興奮と感動を与えてくれました。特に小林先生はずっとKEKに勤めてこられて、TRISTAN計画やBファクトリー実験をサポートしてくださいました。今回の受賞で、基礎科学を地道に進めていくことの重要性について、多くの方々に理解していただけたのではないのでしょうか。また、高エネルギー加速器研究機構の名前を覚えていただくいい機会にもなりました。

— 次の3年間についてはどのような抱負を？

3月に開かれたKEKの経営協議会で、「次の3年間の施策」

を提示しました。大きく4つの柱があります：

- 1) 研究力の向上。さらなる研究の飛躍のために、ロードマップに従ってプロジェクトを遂行すること
- 2) 大学共同利用機関として国内の大学との間で、これまでとは異なる概念の連携体制を構築すること
- 3) アジア各国との連携を強化すること
- 4) 高校生や大学生への教育活動を充実することです。

加速器科学の研究規模や必要経費がどんどん巨大化し、一国で全てをまかなえきれなくなってきた状況で、世界の研究所を一極集中することによって、各国の経費負担を軽減する構想が浮上しています。これは将来、ビッグサイエンスが選択すべき一つの方法でしょう。しかし、科学の進歩を考えると、文化

や価値観が異なる集団が競い合うことがもっとも重要です。また、一極集中は巨大化の問題を根本的には解決せず、将来に先送りするだけです。ビッグサイエンスの発展はいつか行き詰まってしまうと考えています。このため必要なことは、加速器や測定器のまったく新しい革新的技術を、世界中の知恵を結集しながら押し進め、巨大化問題を解決することです。このような視点をもって次の3年間の舵取りをしたいと考えています。

— 産業界とも連携を進めていくことになりませんか？

これまで日本で言われてきた「産学官連携」では、主に研究者の側の努力をうながすことが強調されてきました。しかしながら、諸外国では必ずしもそうではなく、企業が大学や研究機関を頻りに訪れて、新しい応用のタネを積極的に拾い集めています。日本の企業が消極的であることも問題なのです。KEKにおける最先端の技術開発を、産業界の関係者が積極的に取り込めるような呼び水のシステムを作りたいと考えています。

また、日本の産業界は経営の合理化や昨今の経済危機の影響もあって、研究開発や設備投資になかなか思い切った予算を投入できない状況にあるように見えます。このため、企業内で若手の人材育成が難しくなっているという声を聞きます。一方、KEKでは高い水準の技術開発を進めるわけですから、なんらかの形で設備投資を拡充し、多くの企業の人材を結集して、KEKで産学協同作業が行える環境を作るつもりです。発想や手法の異なる人たちによる共同作業から、これまでにないアイデアが生まれ、技術開発が飛躍的な発展を遂げることを期待しています。

— どうもありがとうございました。

最近の話題

■高エネルギー加速器科学研究奨励会 西川賞に超伝導高周波空洞表面・光学検査システム



左から、岩下芳久氏、早野仁司氏、田島裕二郎氏
(画像提供：(財) 高エネルギー加速器科学研究奨励会)

岩下芳久氏(京都大学化学研究所)、田島裕二郎氏(株式会社 東芝)、早野仁司氏(KEK)が、2008年の高エネルギー加速器科学研究奨励会西川賞を共同受賞した。

同賞は、高エネルギー加速器ならびに加速器利用に関する実験装置の研究において、独創性に優れ、かつ論文発表され国際的にも評価の高い業績をあげた、研究者・技術者に贈られる賞である。三氏は、超伝導高周波加速空洞表面・光学検査システムの開発および観察^{*}の功績を称えられ、3月23日に授与式が行われた。ILCの国際共同設計チームのプロジェクト・マネージャーの山本明氏は、「素晴らしい独創的な研究開発があり、それが実際に役立ち、新しい知見を産み、それが国際的にも認められ、日本での評価を確かなものにした、代表的な研究開発だと思います」と述べた。

※2008年4月15日発行【ILC通信】第23号の大学の研究室よりをご参照ください。

■長野でサイエンスポット開催される



会場に並べられたたくさんの展示物を熱心に見る参加者

3月6日、長野県松本市の松本市中央公民館で、サイエンスポット信州が開催され、60名を超える参加者が集まった。サイエンスポット信州は、KEKと大学の連携事業の一つとして採択され、実現したもの。

加速器とはどんな装置なのか、加速器を使った物理実験の様子、またその実験成果についての写真やポスターの展示があったほか、加速器と測定器の一部を展示し、実物に触って実感できるコーナーが設けられ、参加者の好評を博した。

昨年の日本人三氏のノーベル物理学賞受賞理由となった理

論の説明と、その理論を検証した加速器実験について、さらに今後の展開等についてKEKの藤本順平氏、信州大学の竹下徹氏による解説が行われた。参加者が個別に質問できる場を設けると、二人の前には質問の順番待ちをする参加者の列ができた。

サイエンスポットを主催した竹下



解説終了後の講師への質問コーナーの様子

氏は、「自分の地方にも加速器や素粒子に興味を持つ人が大勢いる事が実感できました。ILCも含めて物理学全体について正確でタイミングのよい広報活動が重要である事が再認識されました」と述べた。「リクエストがあれば、全国各地で開催したいと考えています」(藤本氏)

■つくばでTIPP09開かれる

3月12-17日、つくばの国際会議場で、素粒子原子核実験とその関連分野における測定器技術に関する国際会議(TIPP09)が、KEK、総合研究大学院大学、日本物理学会、国際純粋・応用物理学連合(IUPAP)の共催で開催された。TIPP09は、IUPAPが新たにホストする国際会議のシリーズで、こうした実験技術分野にフォーカスした第一回目の会議。

会議の組織委員長をつとめたKEKの幅淳二氏は、「会議のテーマである実験・測定器技術は、Bファクトリー、J-PARC、LHCそして将来のILCなど加速器を利用する多様な素粒子原子核物理学はもちろんの事、様々な観測によって宇宙の謎に挑む研究、生命と物質の研究、さらには産業・医療機器の開発など広大な分野にまたがる共通の横糸です」と述べ、「様々な科学分野で研究の縦割りの弊害が指摘される昨今、多くの『異分野』の研究者が技術という共通の言語で語り合えた事が今回の最大の成果でしょう」と会議の成果を語った。

お知らせ

■【ILC通信】第34号の写真の説明の訂正とお詫び

2009年3月15日発行の【ILC通信】第34号、「実験開始準備完了 ATFの新しいビームライン始動」写真の説明において、一部誤りがありましたので、訂正いたします。関係者および読者のみなさまにはお詫び申し上げます。

巻頭写真 説明

(誤) 陸上競技のレーストラック型に装置が配置されているATF
(正) 多数の収束磁石が設置されたATF2ビームライン。これらの磁石を用いて電子ビームを35ナノメートルまで絞り込みます。

カレンダー

イベント名	期間	場所
ILCカリメータスクール	4/21-26	北京(中国)
日仏素粒子物理研究所ワークショップ	5/20-21	KEK(つくば)
偏極陽電子ワークショップ2009	6/23-26	リヨン(フランス)

KEKの国際貢献

KEKには、毎月世界各地から学生や研究者が訪れ、ILCの為に共同研究を行っています。

